

紙半減で製造業は壊滅

予測できない読書体験の変質

といったインフラ製造業は、おそらく「紙の本」が半減してしまえば立ち行かなくなる。

歩間違えればソフトもハードも解体された「情報の亡霊」に行き着きかねない。アルベルト・マンガエルが

「物である本」と「電子書籍」のメリット・デメリットを冷静に見据えつつ、わたしたちは戦略的に「ストック」を構築していかねばならないだろう。時空にとらわれない流動性とアクセスビリティ。無限の收藏・共有の可能性。省資源・省エネルギーはたしかに魅力だが、書籍電子化は、一

「電子書籍と紙の本が共存すればいい」と多くの人が楽観的に考えているが、薄利多売で「紙の本」を支えている製紙・印刷・製本

たとえば作家の佐藤優は「情報専門家は、スクリーン上の文字や、パワーポイントなどは使わない。記憶に定着できないからだ」と述べている。『ネット・パ

「テキストの物質化」というプロセスの消失により、読書体験そのものがどう変質するか、それがどんな影響を人間にもたらすのか

流動する情報、すなわちウェブ情報のような「フロー」に対し、確固とした情報の「ストック」をどう構築していきけるのか。

たとえば作家の佐藤優は「情報専門家は、スクリーン上の文字や、パワーポイントなどは使わない。記憶に定着できないからだ」と述べている。『ネット・パカ』（青土社）で、ニコラス・G・カーは、「脳はメ

「本は、これから」（岩波新書）で、哲学者の土屋俊が示した「最悪のシナリオ」には、ドキリとさせられる。「書籍電子化にまつわる混乱を放置すれば、立ち行かなくなった既存の印刷メディアの出版産業は衰退し、それにとって代わるべきデジタル、オンライン

「実体としての印刷物の保存」の共存を強調する所以だ。紀田順一郎が直言するように、「書籍電子化」をえるばかりなく、「どうする」という意志がない限り、本の世界は何も変わらな

ディアにに応じて自身を大規模指摘する。憂慮すべきは、

加えて、デジタルデータの脆弱性と、メディアやフォーマットの変動や乱立に伴う膨大なコストとリスクも熟慮されなければならぬ。CDに焼いたデータの耐用年数は、せいぜい一〇年程度と言われる。

「電子書籍と紙の本が共存すればいい」と多くの人が楽観的に考えているが、薄利多売で「紙の本」を支えている製紙・印刷・製本

本は物である
装丁という仕事



桂川潤

『本』は生き残れるか？

本は物である(装丁)という仕事
その歴史から読み取った装丁の仕事に就いて出版文化論
電子時代はこまやかなる本のかたち(装丁)を再考する

新曜社

池田良樹
本は、これから

みんな「本」を愛している！
37人が思いを馳せる、書物と人間の未来形

定価(本体820円+税) 岩波新書最新刊

桂川氏の近著『本は物(モノ)である』(新曜社、本体2400円)は独自の装丁論・書物論の他、本づくりの現場ルポも収録(岩波新書、本体820円)も話題書に

「現在も膨張しつつある人類のコンピュータ上の財産は、いつ消失してもおかしくないという深刻な危険を抱えている」というマンガエルの警告に、わたしたちは真摯に耳を傾けるべきだろう。

「電子書籍と紙の本が共存すればいい」と多くの人が楽観的に考えているが、薄利多売で「紙の本」を支えている製紙・印刷・製本